

お金をゴミに捨てるということ

みずき 啓

令和三年の五月一日はどんな一日だったろう。メーデーの日だったから、雨でなければいいなと天気が気になって、確か晴天でもなく降りそうでもなく、ちょっとだけ曇りのメーデー日和だったかな。

夫の姉の美智子さんから、千早町の八重子叔母さんがその五月一日に九五才で亡くなったと夫に電話があったのは、もう五月も半ばを過ぎていた。ここ何年か施設暮らしだった叔母が、何処でどの様に亡くなったのか美智子さんも知らないようだった。

二十年ほど前、千早町の実家から歩いて三分程の長崎に住む美智子さんが、義母のトキさんを一年ちよつと自宅に引き取り、その後療養型の施設に預けてから、義姉の夫への電話は、ほとんどお金系の話に終始していた。

トキさんにはそこそこの年金収入があり、財産は全部義姉が管理していたけれど、貯金の名義は皆夫と夫

の子供たちになっていて、了解なく他人名義の預金を引き出すのには、さすが、ためらいがあったようだ。美智子姉から電話があるたび、夫は子供の名を誰それと上げて、解約していいよと言っていた。

二〇〇五年、トキさんが九九才を目前にして亡くなり、遺産の全ては夫に託されていた。

稼ぎ下手だった夫を持ち、実入りといったら、自身の年金とちよこちよことあれこれ熱心だった小銭稼ぎ位しか思い当たらない義母の貯金は、四千万位だったらしい。

「私がお金を貯め始めたのは五十近かったからねえ」悔しそうに嘆息していた義母。まあ爪に火を点す以上の生活振りではあった。それにしても四千万とはねえ。

トキさんの金の出し方は実に明確極まりない。孫たちのお年玉と誕生日祝は常識額を律義に、親戚筋への祝儀・不祝儀は相場以上。入学祝となると教師生活の長かったせいか、これはこれは法外な金額。しかし、それ以外はトキさんの財布は石の塊り、貝の口。毎月の来訪も手土産なし。うちと一緒に行く年に二回の二

泊の旅行もおんぶにだっこ、孫にアイスのひとつも買
ってやるではない。それなのに、義母は財布の他にテ
ィッシュで包んだ千円を常に肌身に付けていてしよつ
ちゆう、

「なくした」「見つからない」と大騒ぎ。それを車の中
でやると、運転中の夫は声を荒げる。
まあ、大体じきに見つかるんだけどね。

私にはトキさんに直にお金を差し出された経験が二
度ある。

一度は、三度目のお産の時。夫は予定日の半月も前
からお産の手伝いと称して義母を秦野に呼んだ。習近
平もたじろぐ仏頂面で玄関に現れた義母は、私の挨拶
にも無言の行。

もともと義母は、上膳据え膳の人、他の人の居ない
時の嫁いびりは当たり前、が持論。当然、嫁姑関係は
一週間で完全に煮詰まった。その時、トキさんが私に
出して来たのが、二十万と上書きされた出産祝いの封
筒。

あの時のいびりで私が一番こたえたのは、義母の布
団干し。妊婦にとって階段はただでさえ緊張のもと。
人一倍のスイカ腹に布団を担ぐとなると、上りはまだ

いい。下りは私とお腹の子が布団と一緒に転げ落ちる
予感みれの脂汗。無事に降り終わったとたん、階段
下で布団と一緒にしやがみ込んでしまったこともあつ
た。最近、夫だつて布団ごと踏み外した。

封筒を出される前から義母に対して既に怒っていた
し、無事に出産までこぎつけられるのか、こんな危な
い事させられて。大体出産前のお産祝いつてどうよ。
トキさんの最初の孫は出産時の事故で亡くなって生れ
たじゃない。それも千早町の病院で。私は断固、受け
拒否！どうせ、夫の机の引き出しに直行し、私の知ら
ない夫の通帳に入るだけの二十万だった。夫は、
「注意して降りれば問題ないよ」

と言うばかり。夫は布団を担いだことも妊娠したこと
もない。

私たちの見合いの後、デートの度にトキさんはデー
トの内容を聞いただし、夫は仔細に報告したんだつて。
「だつて、しつこく聞いてくるんだもん」
このマザコン坊や。ママの言うことは、常に正しいの
だ。

二度目はトキさんの米寿祝の会を我が家で開いた時。
まず、トキ家の集まり一回目は、美智子義姉の長子
の美帆が人見知り真っ最中でした。家の玄関に入るな

り美帆は。パパの腕の中で、出迎えた夫をチラッと見ては泣き、チラッと見てはべそをかきしていたものだ。それから何度かトキ家の面々が我が家に集まった。料理係の私がお皿を並べると、後はトキさんの独壇場。家長顔の八面六臂で座を仕切る。

遠い千葉一家も日帰りなので、昼食と早い夕食を出す。皿洗いに料理に、私一人のがむしやら行進曲。義母から、ご苦労様とか言われたことはついぞ、なかった。

しかし米寿祝のトキさんはさすが（場に敏感な人）お正客の席で（お雛様）していた。

お祝いの後、キッチンで、

「これでセーターでも買って」

と、義母から一万円を渡された時にはビックリ腰になりそうだった。お礼を言い、すぐ貰った。

九八歳で病院暮らしの**義母**が逝った後暫くは、姉たち、特に美智子さんはよく夫へ電話をよこしていた。

遺産から、夫は美智子姉にトキ家とその解体撤去費（現在、家は義姉の物置き）、プラス現金。千葉の上の

姉啓子さんには現金を渡したそうだ。

その後、美智子姉からの滅多にこない電話は、子なしの叔父・叔母たちの相続の話と姉自身のあつちが痛いこつちが悪い話に変った。

長女のトキと戦死した叔父、神戸の叔父、清子叔母、そして八重子叔母の小学校教師だった父親は、大正から昭和と新潟や四国などを歴任した後、池袋の千早町の百坪の地所に自宅と貸家を建て、間を扉で仕切った。戦前のことである。

戦後、父親は既に身まかっていたが、その自宅と貸家は焼け残った。

八重子叔母さんはトキさんとは二十歳近く下。東京薬科大学出だと聞いているが、ずうっと東大に勤めていた。何処でどう知り合ったのか、どう血迷ったか聞いてないか聞いても忘れたか、夫の勝さんは東大出の、へえーとなるような美男子である。端正な目鼻立ちがスキッと明るい、どちらかと言えば可愛い系の。残念なこと、女を惹き寄せる翳はない。日立製作所の中央研究所のお偉いさんで、夫の入社にも世話になったらしい。退職後、長岡の大学で長々教授をしていた。

一方の叔母は、トキさん似で色黒の小柄。シャキシヤキと法被の似合うキレのよさ。ガキ大将的茶目っ気。スキーを始めればインストラクターまで上り詰めるスポーツウーマン。道ですれ違ったらつい振り返ってしまふどこか変人の雰囲気もあつた。私は何度か会つた訳でもないのに、この風変わりな叔母に惹かれていた。

「妙子は八重子さんが好きだよね」

夫もお見通し。彼自身は八重子叔母が大の苦手で、しきりと不思議がる。

国会図書館勤めの清子叔母は、妹とは対極の印象。湿り気をたつぷりと吸つた上品な色白肌。中背。おっとりしつとり、日本情緒をかもし美女と言つたら、絶対褒めすぎなのだが。口数の少ない令嬢タイプ。しかし、暗い所では出会いたくないなあ、の感じもあつた。

車一台がやつと通れる路地に面したトキ家に行く度、隣の叔母家の玄関横のコンクリートの引込に車を肩入れさせてもらった。八重子叔母の外車はその引込の奥、木製の高い両開き扉の中にチンとしていた。義母は予め駐車を頼んでおり、夫も実家に上がる前に隣家へ挨拶に出向いた。

晩ご飯の時、清子叔母が揚げ物など一品持つて、玄関にしんねりと現れる時もあった。あの頃は叔母達も叔母として隣家の姪甥達に立派に振る舞つていた。

毎年、息子家族が正月をトキ家で迎える。毎月一回、親たちが息子の家を訪問。という基本方針が、結婚前に既にトキ家において成立していた。最初の内は毎月両親揃つて秦野にみえたが、道中二人の間で不具合が起きたらしく、じきに一人ずつ交代でと、なつた。

結婚五年後に義父が他界してからは、正月も毎月の訪問も義母の秦野での三、四日の逗留行事になつた。自然、八重子叔母たちに会う機会が消えた。

結婚の翌年の正月だつたらうか、八重子叔母さんに夫と隣家に呼ばれたことがある。

なにしろ戦前の家であるから。玄関口はガラス格子の引戸、一坪の三和土の土間、上がり框にガラス格子の引戸があつて、入つたところが三畳の畳敷き。ここまではトキ家と同じ。その先の廊下に、泥足で出入りする猫達のために延々と新聞紙が敷き詰めてあつた。その辺りの不潔関係についてはかなり神経質な私は、新聞紙を踏まないよう大跨ぎで苦労して左手の居間へ。

大きな堀こたつが隅っこの方に据えてあるのもトキ家と同じしつらえだが、部屋自体はずっと広く、トキ家にはない明かり障子は精緻な細工物。手間もお金も掛けた家と知れる。貸家の安普請のトキ家では、既に少々家が傾き、壁の隙間から隣家の灯りが射していた。

しかし、どう解釈したらいいのか。その広い畳の空間に、直径一呎に及ぶ中身の詰まった買ひ物袋ばかりの小山が出来ている。しかも四つ。山と山の間は小道がある。

掘り炬燵の大きな天板の半分には、何やら雑多なグツズの層。その空白部分に夫と二人で並んで身を入れた。叔母さんの背中側のすぐの壁に茶箆筥があり、「手さえ伸ばせば、座ったままで何でも用を足せるよ」だそうだ。

トキ家の女性陣五人（叔母たち、義母に義姉妹）は、家事は苦手らしい。

新婚旅行から車の置いてある千早町に帰った時、手伝いましょうと台所に入った。

「そこは聖域だから入っちゃ駄目」と背中に夫の声。義母は床に小さな俎板を置き蹲って、何やら刻み物の最中。（何も見てない、何も見てない）と慌てて退却。

五人とも、家事は苦手だが、熱心にお金を稼ぐことに特化している。勿論、それはそれで異論のない立派な生き方だが、揃いも揃って物を溜め込みたがる方ははてなマーク。

必要以外の物は買わない。必要でも買わない主義。当然、一番溜め込みが少ないのはトキさんで、夫の過つての勉強部屋は収納庫と化している。お宝は、町内会館の資源回収集積所やゴミ集積所からピックアップしてくる。結婚した時、

「さあ 好きなだけ持てて」と得意満面を出してきたダンボールには、ほとんどプラスチックの粗品の山。プラスチック嫌いの私はいいやや大根おろしなんかをつまんだ。

あの時、はつきり断れば良かった。はつきり断れば後々我が家にゴミを持ち込まれることはなかった。

「掃除機は千早町に余ってるのが有るから揃えないで」と言われていた。その掃除機は古色蒼然とした三菱の箱型。これもいやいや貰った。しかし、これが吸い込みが極端に悪い代物。

「あれ 使えない」と言ったら。夫が試運転。

「問題ないことを照明してやった」ところが、よくよく見たら飴色のホース全体が劣化し

てレース状態。何年経ったらあんなになるんだろう。夫への不信感が残った。

娘達が小学生だった間は、毎月、大量の古着。破れていたって、お構いなし。

粉チーズの末路を見た人はあまりいなと思う。あのスパゲッティなんか振りかけるやつ。義母が持って来た粉チーズが出ない。不思議だなあと中をみると、褐色のドロドロ。七味唐辛子も出ない。ツララ状態。使いかけしか持つてこない。

不揃いの食器達だって薄汚い。三分の一は欠けたり罅が入ったり。

我が家でトキ家の正月祝いをした際、千葉の義兄が、「かあさん　うちも片付けてさ、ちつとは人の呼べる家にしようよ」　啓子姉無視。

美智子さんと叔母たちは、物（ゴミ）の中に人間がいる状況。

九二、三才までトキさんは、千早町から秦野まででも難儀だろうに、そのうえ秦野駅からせつせと四五分、三分の一はかなりの山道を、毎月歩いて我が家にやつ

て来た。夫が何度言っても、迎えを頼む電話はよこさなかった。電話代とバス代を節約して。始め、義母は歩くのが好きなんだと私は信じていた。

「途中、道に迷った、迷った。どこにいるのか判んなくなっちゃって、一時間もグルグル、グルグル、人に聞いても埒が明かないのよ」

大きく手を振りまわしながら、来る度繰り返すようになった。でまかせだと思った。義母は、つく意味がどこにあるのか解らない嘘をやたら頻発する人だった。

旅費はタダだが、そのホテルの草むしりをするツア―に友人たちと行った後、トキさんは我が家の草むしりをするようになった。上膳据え膳の一角を崩してしまった。そして、じわじわと強気が削れ、こちらの顔を時に窺うように変化した。そんな義母を見るにつけ、もう独居のリミットが来ていると私は実感していた。義母を一人にしている罪悪感と裏腹に、義母が強力であった時には押し込められていた嫌悪感がジクジクと浸み出し、胸を汚した。もう義母を生理的に耐えられなくなっていた。何十年もの我慢の底だった。

「九〇過ぎたおかあさんを千早町から来させるのは無理だよ。大事が起きないうちに、貴方が千早町に行くようにしたら」

夫がトキ家にしぶしぶ行くようになった。正月は秦野で迎えるように車で送り迎えの段取りを年末に夫がつけると、

「トキさんの体調が良くないから、お正月はうちでみる」と義姉の電話。義姉は何かと義母の秦野行を阻止するようになっていた。しかし、その翌日の大晦日にトキさんが突然、玄關に立っていた、事もあった。

九四才の初夏、トキさんは雨の中、たしか傘も差さずしやがみ込んでいて、救急車で入院した。直ぐに退院に至ったが。

「もう おかあさん引き取らなきや駄目だ」と、私。

昭和の始め、結婚した時義父の両親は既に他界していたので、義母は嫁の立場の経験がない。しかし、トキさんは自身の親世代時分に流布していたらしい嫁いびり、継母継子話の愛好的信者で、秦野に来る度二人きりになると、私は耳タコで聞かされていた。最後に「私あそんなことしない」と必ず言う。自分の周り、友達や近所を見回せば、とつくに通らぬことも分かっている。しかし、上膳据え膳嫁いびりは、家事嫌いの義母の夢のユートピアであった。人生思うにまかせなかつた義母、その未来が、息子の大学合格の瞬間、

「さあ、これで息子の将来は決まった。息子に嫁を貰って、私の古い先も安泰。私の生涯大逆転だ。上膳据え膳だつて軽い軽い」となったのか。単なる自己思考の結果か。

私は、トキさんがカマかけしてくる秦野の同居は義母には地獄行、とみていた。家嫌いの大の外出好き。何も買わないが、嬉々として粗品の列に並び、試食三昧のデパート歩きに日々を費やし、高齢者用バスの無料パスを駆使し、知人宅に月一で長時間居座つては非常識と呆れられ、出入り禁止になる、を繰り返す。大都会生活と骨がらみのトキさんに、無料パスもなく、出掛ける場所の少ない田舎暮らしは、無理中のムリ、発狂しちやう。と、トキさんが元気な時は確信していた。

しかし、義母の足腰も弱った。

寝たきり状態でも嫁いびりはたつぷりやれると戦々恐々だが、トキさんを迎える前に、キッチンなど水回りの天井から床までの大改装に入った。段差に台をあてがい手すりを付け、義母の部屋にテレビを据え押入れを空っぽにした。

「おふくろのいじめ対策に妙子の逃げ場のアパートを

用意するから」

土曜日、夫はトキさんを迎えに行った。

しかし、

「千早に着いたんだけど、おふくろ居ないんだよ。玄関に荷物を作って置いて在るんだけどさあ。暫く待ってもちっとも帰って来ないから姉に電話したら、家に來てるから、尚さんと一緒に連れて帰るって」

二時間後。

「おふくろ帰ってくる途中で倒れちゃったんだ。救急車で病院。姉が付いてる。様子みて今日はそのまま帰る事になりそうだ」

義母は、直ぐの木曜日に退院したが、夫は会社が休みの土曜日までの二日間の面倒を姉に頼んだ。

義姉と夫の尚さんは徹夜で部屋を片付け、何とかグランドピアノの下にトキさんの寝場所を確保したそうだ。美智子さんは芸大の音楽科出身。そして義姉曰く、

「トキさんはずっと家で見えるから」

夫はトキ家の片付けと姉の家の母の元に通うようになった。片付けに入る度に、着替えは持って行ってもダニだか何だか、毎回足を腫らして帰って來た。

義姉の家は、もう洗濯機もガス台も電話も物に埋もれて、使用不能。お湯はポットで沸かせるが、あとは

買いい食いするしかない状態。とは夫の報告。デパ地下生活で世界の珍味を賞味していると義姉は豪語しているらしい。

結婚五年後の暮れに義父が亡くなった翌年、八重子叔母が東大で何をしていたのか知らないが、
「東海大で、二日間の学会があるんだよ」と電話して來た。

「千早から二度も往復するのは無駄だから家に泊まれば」東海大学と秦野は一駅である。

バス停まで迎えに行くと、

「太ったね」

「妊娠しているのよ」

「なるほど」

八重子叔母との一夜は楽しかった。

八〇代も終わり頃秦野に來て、義母は土地の境のこゝとで隣家と喧嘩状態になっていると嘆く。長年塀を境にしてたんだし、庭がボーボー状態の隣家にとってはどうしても土地ではないが、トキさんにとっては草木を植え、台所で使っていた古いタイトルのシンクに金

魚を飼い、何処から集めて来た木片を燃やしてコンロで煮炊きをしていたトキさんの一人遊びの庭だった。千早町の一〇〇坪の土地は実はずっと借地で、数年前に隣家は七五坪分を地主から買い取った。その際義母にも声が掛かったが元々家には無関心な人だし、夫が今は買い時じゃないと言ったので誘いを断った。何故一緒に買わないんだとなり、その辺りからそれまで軽く鞆当てで済んでいた八重子叔母とトキさんの遭遇は、俄然、熱を帯びたらしい。隣家も高買いしたのは事実で、当方は、値下がりを確認後夫が出向いて安く手に入れた。

隣家の主張は、
(元来この土地は父親が四人の子供へ二五坪ずつ四等分したものだ。しかるにトキ家は三〇坪近くを不当に占有している)

義母の主張は、
(占有は事実であるが、その五坪分は地代として長年にわたり隣家に払い続けている)

隣家曰く、
「地代は要らないヨ。土地を返して貰おう」
鞆当ては罅迫り合いへと緊迫。

「地代を払っているんなら、急な返還を向こうは要求できないじゃないんですか」と口を挟んだのが禍のもと。私は、隣家と話し合いに(果し合いに)行くことになってしまった。

昼でも何となく暗い居間の掘り炬燵に井ぶり弁当を一つ置き、トキさんが蹲っていた。トキ家で義母を見るのは何年ぶりだろう。秦野で見るより生気がまるでない。何だか翳が濃い。秦野でのトキさんは幸せな時間だったんだ。

井ぶり弁当を食べて外に出ると、八重子叔母さん達二人が既に外にスタンバイ完了。三人で隣家の前を通り、路地を鉤の手にまがる。その先に、息の詰まる程べったりとくっついて、殆んどそっくりな二階屋の建売りが三軒。元々の一家屋を更地にして無理やり三軒押し込んだのだろう。緑の余地は玄関横の僅かな植込みだけ。その真ん中の家を指して、

「買ったの」と言う。

「えっ 何に使ってるの」

「物置ささ」

「へえ〜 贅沢う」

通りに出る。この辺りに熊谷守一美術館のコンクリ

ト壁見た気がする。方向音痴だから分らないけど。週に三度は来ると言うお洒落なカフェの二階。八重子叔母と清子叔母は白いボンゴレビアンコなんかをスルスルしている。これから私をどう料理してやろうとか、考えてるんだろう。

私は、怠りなく義母は地代を払い続けたのだから、法的に土地使用権はトキさんにある。返還を求めるには、猶予期間を設けなければならぬ、と述べた。

「頭のいい人って 怖い」

と、頭がいいとも怖いとも思っていない清子叔母は、乙女っぽく胸を抱く。

「払ってる証拠がないでしょ」八重子叔母。

(アッ、エッ、領収書渡してないんだ)

「証拠なら有ります」私のはったり。

「あつ 日記だ」清子叔母がのけぞる。

私、大きく頷く。

義母は秦野でも広告の裏紙に毎日何やら大きな字で日記を書きつけていた。

内気で無口な人の認識だった清子叔母が、妹を凌いで敢然と急先鋒に立って、義母の悪行を言いつのり出したのには、魂消た。今回の土地返せ問題の根は深く、実は運命的に姉妹となって以来からずっとずっと続い

ていた確執に行き着くらしい。

結婚して麴町に所帯を持っていた義母は、戦争末期に母子四人で長野に疎開した。戦後三年して夫が小一になった頃、疎開者の苦勞が染み込んだ痩せてこれ以上小さくはなれない身体で、義母は池袋にもどった。

疎開前に住んでいた麴町の家は焼け、小学校教師だった義父は占いで出たとか何とか言つて、印刷業を起こしに関西へ行つてしまい、千早町の借家は弁護士一家が住んでいた。トキさん母子四人は、祖母と二〇代前半の叔母姉妹の住む主屋に転がり込んだ。あの堀こたつの部屋を占拠したらしい。

そして、抗争が始まった。

トキさんは小一の夫以外は全て女所帯の長女として母親を差し置いて君臨したらしい。叔母姉妹から見れば、降つて現れた侵入者である。その姉、二十近くも年上の姉に指図されこき使われる理不尽な日々。十歳も離れていない姪達と義母の難攻不落の団結。戦争は終わったというのに家の中に次ぐ戦いの日々。

関西の義父は商売がうまくいかず、男一人カツカツの生活。日本中がその日の生活に追われていたが、三人の子を抱え一人獅子奮迅、義母にとつて貧窮と戦つた時期ではあつた。印刷業ははかばかしくなかつたが、

義父は二十年近く帰って来なかった。

授業料の安い国立とは言え、三人揃って大学を出した、義母の石の信念。あの頃、女性の進学率は0に近い方の一桁だった。義母の鬼も涙の奮闘の結果として、母子四人の密着度は異常に高い。

「あの人の口癖は『○○だからいいのよ』って。子供たちが悪さしたって、まだ子供だから、とか学校行っただからとか、こっちがそれだけでぺっしゅんこ、悪者されつちまう。ホント腹が立つ」

自己中の傾向大有りで、確かに義母の口癖は、女だから、年寄りだから、親戚だから、知り合いだから、いいのよ。これでは振る舞いは見苦しくなる。

こちらの好意でたまたまして上げた事が、いつのまにか義母の既得権になっている。バウンドケーキをたまたま余計に焼いて、お義姉さんにとトキさんに託すと、次回から

「あれは」となる。

既得権が積み重なるとこちらは苦しいです。

「あの人はいつつも芝居してるのよ」と八重子叔母。

義母はべらんめえから山の手言葉まで自在に操る人だった。それに従い人格も七変化。夫は母としてだけの、子供たちは祖母としてだけの一面しか見ていない。しかし、私はトキさんの様々な面に遭遇させられた、千変万化だった。

叔母達の恨みつらみ怒りは、私自身のものであった。

その内、義母を引き取るから、土地の線引きはそれからにして、と言っても、

「そんなの、いつになるかならないか分かんないわよ」転居してからでは、復讐にならないのである。義母の晩年に一矢も二矢も打ち込みたい一心なのだ。その一心に法的に風穴を開けたい一心の私。

叔母達と堂々巡りの末、トキ家に戻る。

義母は電気も点けず、もう暗くなった炬燵でラジオを前に蹲っていた。

「もう遅いから帰んなさい」

顔を見るなり言う。帰った。

聞くところによると、その後、母べったりの美智子義姉も隣家との抗争に参戦、卍戦となり延々とバトルが繰り広げられたが、主な争点は矢張り戦後の同居中

のことプラス諸々。カッカしやすい義姉がキレまくって、叔母達のどツボにハマリ、

「もういい。勝手にしたらいい」

最後の捨て台詞で、勝負がついた。義姉は勝ったつもりで息巻いてるが、向こうは線引きを手に入れた。

義母の柿の木は切られ、白々と明るくなった居間に焦心の胸を掻き穿った。

しかし、バトルは終わらなかった。

長岡の大学を辞し千早に戻った叔父の勝さんは、義姉をチラッとでも見ると、サツと

家に引っ込んでしまわらしい。叔母達は勝利の旨酒を一気飲み、グツと戦闘力を高めた。

一方、秦野詣でも出来なくなつて息子の定期便の話も無視しがちになり、義母は次第に対抗力を弱め、最後はゴミ出しさえ隣家の口出しで出来なくなり、義姉が時々自宅に運んでいると言う。荒れていく家の中で義母は絶望を抱きしめていたのかもしれない。

二〇〇五年に義母が亡くなった際の葬儀に叔母達は来なかった。八〇過ぎの清子叔母に認知症がでて八重子叔母が看ている、の理由だった。

数年後、清子叔母が亡くなり、遺産は全て八重子叔

母が相続したと、後見人だか銀行だったか、一冊の文書が届いた。

その後、八重子叔母が施設に入った。叔父は美智子さんにはどこそこの施設とも、何故施設に入ったのかも、言わない。

神戸の亡くなった叔父の三男、母に溺愛され独り身のフラフラ男の良三が隣家を東京の定宿していて、遺産相続の話も出てたらしい。ところが、九〇歳を越した叔父の家にちよくちよく出入りする人が現れたと良三が美智子さんに言う。その人が叔父の養子になっており、叔父の遺産は全部相続すると、遭遇した良三に宣言したらしい。その人は美智子さんの近所の、顔は知っている程度の主婦。ぼくとした感じの何を考えているのか解らない人らしい。

夫は良三に、急いで八重子叔母さんに後見人を付けないきや駄目だとアドバイス。

結局その主婦は、叔父からの相続を公正証書にもしていた。

叔父が亡くなったことは随分と日が経ってから聞いた。葬式の報せは、清子叔母同様なかった。

五月の半ばに、美智子さんから八重子叔母の訃報を

聞き、叔母さんの後見人から相続関連の文書が届いたのは六月に入っていた。

八重子叔母の戸籍名はヤエだった。そう言えば義母はヤエとかキヨと呼んでいた。

二〇〇五年、トキさんが亡くなった年に書かれた八重子叔母さんの遺書は、夫の勝に全てを遺すものだった。叔父は亡くなっているのに、法定相続人は、トキさんの子供たち三名と神戸の叔父さんの遺児三名。

あの主婦は八重子叔母の養子にはなっていないかもしれない。もしなっていたら、隣家の全財産を相続する結果になるところだった。くわばらくわばら。

八重子叔母の財産は隣家の二分の一、あとの二分の一はあの主婦の権利。例の物置きになっている二階家の三分の二。三分の一は主婦。叔父の長岡のマンションの部屋。エンド、預金八千三百万円。

弁護士でもある後見人は、それ以外に叔母の預金通帳から引き出した三千何百万円と行方不明の八百万円の叔父のタンス貯金の返還を主婦に求めている。

ウーン、考え込んでしまう。叔父や叔母たちは古屋に住み続け、何故金を使い切ってしまったのか。

一億は大金だが、パッと使い捨てにも出来る額でもある。

あのショッピングバッグの四つの堆積からすると、ショッピングは好きだったみたいだが。天敵のトキさんの子供たちに自分たちのお金が流出するとは、八重子叔母さんの歯齧みが聞こえるようだ。